6月 園だより

令和６年 6月１日
佛教大学附属こども園

「仏教保育 ６月のねらい」
生命尊重

「多眼的子育て」

園長 佐藤和順

広沢池の周りの木々も緑を増し、雑草も雨が降るたびに根強く伸びているように感じます。園児も園生活に慣れ、雨が降らなければ外で、雨が降っていれば室内で元気いっぱい活動しています。

さて今月の保育目標は「生命尊重（せいめいそんちょう）生きものを大切にしよう」です。自分の生命を大切にすることと同様に、他の人間および人間以外のすべての生物の生命を大切にすることは、幼児の情操に大きな影響を及ぼすことです。各自で充分心がけたいものです。

生物には多様な特性・特徴があります。園庭の隅では、だんご虫やアリ、いろいろな虫を探している子どもの姿が見られます。捕まえた虫は観察ケースに入れ、図鑑で調べたり、飼い方はどうすれば良いのか自分達が知っている知恵を出し合います。時には、力が入りすぎ、潰してしまうこともあるかもしれません。そのような事を経験しながら手加減すること、力加減を学んでいくのです。

物事を見るには虫の眼と鳥の眼が必要だといわれます。虫の眼とは、地面を這って歩くように小さな変化も見逃さないきめ細やかな観察眼のこと。これに対して鳥の眼とは、大空から地上を見下ろすように、俯瞰的に大局をとらえる眼のことを指しています。これは、子育てにも通じることだと思います。保護者であれば、いつでも我が子の変化を敏感に感じ取りながら過ごされていることと思います。何となく元気がなく、調べると熱があったということは誰もが経験していることでしょう。こども園で子どもは、いろいろな経験をします。時には友だちとけんかしたり、先生から注意されることもあるでしょう。自分にも非があるとは言えないまま、一方的に「意地悪された」「ケンカした」と話すこともあるかもしれません。子どもの言い分に寄り添い話を聞くことは大切なことです。しかし、それを鵜呑みにするのではなく、鳥が空から見下ろすように、俯瞰的に事実を確認し、客観的に対処する余裕が欲しいものです。「泣いたカラスがもう笑う」というように、子どもの世界は流動的です。さっきまでけんかしていた相手と仲良く遊んだりということも少なくありません。「少し様子を見る」「大局的に判断する」という態度、虫の眼に加え鳥の眼を持つ多様な視点をもつ子育てがバランスの良い子育てかもしれません。

生物が活動的になるこの時期、生物やその行動の多様性を確認するとともに、時代の流れを読む魚の眼、逆さまになって視点を変えてみるコウモリの眼など、いろいろな眼（多眼的視点）を持ち合わせれば、一層、子育てを楽しむことができると思います。